

多彩な新趣向、郷土色も盛りこんで

第16回総会・パーティー

260名が集い、岳南健児の意気高し！



静中・静高 関東同窓会 会報

静中・静高関東同窓会
会報 第30号
平成2年12月19日発行
編集人 上杉重吉

静中・静高関東同窓会平成2年度総会（第十六回）は、六月八日（金）午後六時半から盛大に開催された。

年に一回、先輩・同輩・後輩が懇親の実を挙げる総会——今年は思い切った新機軸が編み出された。

より多数の同窓生の参集をとの大石巖会長などの配慮で、まず会場は地理的にも便利な新日本証券の大会場で、会費も前年比千円安の五千円とし、在学生は思い切った無料としたのである。

総会はず先校歌の斉唱で始まり、大石関東同窓会々長は「同窓の誼を大切に、更に力強く前進を！」と挨拶された。

来賓として川村春雄同窓会副会長から「本日は本部から関東支部への助成金を持参しました」の話があり、鈴木与平会長等のご尽力に対し盛大な拍手がわきおこった。また、今春四月に赴任された石田徳行校長先生からは母校の現況報告や母校・卒業生への協力依頼の挨拶があった。

続いて議事に移り、平成元年度事業報告、会計及び監査報告、ついで二年度の事業計画と予算計画が諮られて、それぞれが承認された（別掲）。

パーティーは最年長の38期石割正先輩を中央に、新入会員の大学生四女性の音頭による乾杯によって始められた。

郷土色を盛りこんだ料理などを賞味しながら、来賓五名、一般二百二十名、学生三十七名の交歓の輪が出来、会場は熱気に包まれていった……。

この日出席の有志の發議で後日同期会を久しぶりに開いた期も多いと聞く。同窓会は同期会の連合体でもあるので、同窓会のより発展のために望ましいことである。

約二時間の盛宴は、校歌大合唱、万歳三唱で幕を閉じた。

その後の同窓会活動

（平成2年6月～2年11月）

◇総会

6月8日（金）18時30分～

◇幹事会

8月2日（木）18時30分～

新日本証券地下一階食堂

出席者：44名

・平成2年度総会報告

会報29号の發送依頼

◎会報發送の協同作業

幹事不在や幹事会に幹事欠席の

平成元年度 静中・静高関東同窓会決算書

(H1.4.1~H2.3.31)

I 収 入	
63年度繰越金	490,750円
元年度会費(790名)	1,631,000円
広 告 料	390,000円
寄 附 金	30,000円
預 金 利 息	4,320円
総 会 収 入	24,621円
助 成 金 本部より	600,000円

計 3,170,691円

II 支 出	
名 簿	850,000円
会 報	447,500円
郵 送 費	860,536円
印 刷 費	136,636円
人 件 費 (アルバイト)	100,000円
消 耗 品 費	34,000円
事 務 用 品 費	339円
交 際 費	60,160円
交 通 費	30,040円
雑 費	6,300円
会 合 補 助 費	433,478円

計 2,958,989円

III 残 高 (次年度繰越) 211,702円

IV 特別入金 (本部より) 2,000,000円

記念品代 (前会長へ) 300,000円

計 1,700,000円

上記監査の結果適正であることを認めます。

平成2年5月10日

監 事 後 藤 弘 枝
監 事 松 野 敦 子

平成2年度 事業計画

1. 総 会 年 1 回
2. 顧 問 会 年 1 ~ 2 回
3. 幹 事 会 年 5 回位
顧問会と幹事会は合同でやる場合もあります。
4. 会報の発行 年 2 回 (6 月・11 月発行)
5. 懇 親 会 ゴルフ大会 (年 2 回)
釣り大会、ハイキング大会 (年 1 回) 等

平成2年度 静中・静高関東同窓会予算

(H 2.4.1 ~ H 3.3.31)

I 収 入	
繰 越 金	211,702円
年 会 費 2,000円×900人	1,800,000円
広 告 収 入	260,000円
助 成 金	700,000円

計 2,971,702円

II 支 出	
会報発行費	450,000円
郵 送 費	800,000円
消 耗 品 費	50,000円
印 刷 費	140,000円
人 件 費	100,000円
事 務 用 品 費	5,000円
会 合 補 助 費	500,000円
交 際 費	60,000円
交 通 費	30,000円
謝 礼	100,000円
会報編集費	50,000円
予 備 費	686,702円

計 2,971,702円

III 特別入金 (本部より) 3,000,000円

「会報」30号発行を迎えて……

Ⅱ 一層の発展のため、ぜひご協力を！

関東支部会報の創刊は昭和51年6月3日、以後、毎年6月と12月の二回発行を続けて、今号は30号という節目を迎えた。

支部発足の第一回総会が、東京会館に三六〇名集まって開催されたのが50年6月3日であったので、それからちょうど一年後に会報の刊行が始まり、今日まで15年間、会員の絆を強固にする役割を果たしてきたといえよう。

創刊号を播くと、まず宮澤次郎

会長が『ごあいさつ』で「私たちが年齢を忘れ、仕事を離れ、いつまでも中学生(高校生)でいられる、心から楽しい会がこの同窓会です。また、忙しい東京の都会の中にいながら、私たちが共通のふるさと静岡の地に心を帰らせるこ

期の会員に対し発送する会報29号千四百通の宛名書きに、有志が汗を流した。

8月7日夕方から「大雄」設計事務所西沢(43)奥野(53)上杉(60)梶原(67)荒谷(68)味岡・中馬・宮本(70)荒井(90)九氏と山田氏が集まり、四時間余にわたって筆を走らせた。

◇第2回印高会ゴルフ会
10月31日(水)
箱根カントリークラブ
優勝：松永秀夫(77)
◇幹事会
10月18日(木)18時30分?
新日本証券地下食堂

とのできるのも、この同窓会のおかげだと思えます……」と述べられ、鈴木与平同窓会会長は「会報発刊に当たって」の中で、「……東京を中心とした関東支部は、実際には本部よりも重要性を持っている大きな存在であることは、地方所在の学校同窓会の共通性であり、その意味でも関東支部の発展は静中・静高同窓会の発展に繋がるといえますように。」と一文を寄せておられる。

つづく『今昔思い出の記』には26期土屋正三、32期岡本敏興、34期寺尾琢磨、元校長諏訪卓三、70期三木卓の各氏の寄稿がある。そして全16ページの残り9ページに『各期便り』が掲載されている。

その後、この30号まで、読みや

すいB5判で16ページ乃至24ページ、毎号多数の方々の寄稿により誌面を飾ることができて、各期幹事のご協力に心から感謝したい。また、広告掲載の各位、母校の近況などの『静岡だより』を寄せてくださる静岡新聞社勤務の同窓生、榎大雄の山田さん、そして印刷関係者等、ご担当の54期庵原梯次氏などのご尽力にあらためて謝意を表したいと思う。

今後、この会報を、さらに岳南健児親睦の一助にするため、ご希望やご提案など、ぜひ皆様のご協力をお願いする次第である。

(上杉重吉記)

同期会など

四三期

われわれ四三会員は明治四十三年(千九百十年)生れであるので今年で満八十歳になる。

去る二月二十日静岡の三笑亭で傘寿の祝賀大会を開いた。三笑会を昼席にした第一回は昭和五十七年四月二十日に開き、毎月二十日に定期的に開くことにしてから、ずっと続けられていたがこの平成二年七月二十日で第百回記念大会を開くことができた。

この間、毎回出席されていた三笑亭の大石貞次君、名幹事であった小杉一君、その他多数の旧友も故人となられてしまったが、集った者一同これからは元気で出席し回を重ねて、平成十年には米寿

を迎え三笑会も第二百回目を迎える年になる。また年に一度の四三会も丁度第百回目に当る。出席者一同で頑張ることを申し合せた。その先更に二十一世紀を迎えるまでクラス会を続けていきたいものである。

七月二十日の当日私は元担当したところのある大正七年(千九百十五年)創業の東芝積算電力計起業七十五周年記念祝賀大会に招待を受けていたので、残念な三笑会には欠席してしまった。当日は会員十二名が集まり、大阪より平山君が遠路出席された。当日は平山君が古都奈良散策の折偶然に出合った妙齡の美女二人が出席された。聞けば郷里は静岡。静岡第百三期卒業の現奈良女子大学生の才媛で

われわれが還暦の時、御誕生の芳記正に二十歳の同窓生であった。お一人は三笑亭当主の姪御さんであった。七月は帰静中とのことでお誘いしたところ、早速お越しいただいたわけである。



第百回記念のクラス会に老頭児ばかりの集りに錦上添花をそえて、新人女性同窓生を迎えての賑やかな集りとなった。母校も今年は新校舎も落成し、学業にクラブ活動に益々の発展を期待したい。また御両人の前途を祝福する。

私の卒業した旅順工科大学は旧関東州にあり、明治四十三年の創

立で昭和二十年の終戦と同時に消え去ったが、同窓会は今も健在で毎年創立記念日には同窓会が開かれている。本年は創立八十周年に当るので記念祝賀大会を東京のホテルで開催したが約五百名が集って盛会裡に祝うことができた。

毎年十月に開かれている日本寮歌祭も昭和三十六年に第一回が開かれてより昭和六十三年の第二十八回が昭和天皇の御病気で中止となったが、本年は第三十回記念大会となり、旧制一高、二高、三高……各高校、北海道、京城、台北各帝大予科、南大、工大、医大各予科、その他のOBが参加して五十五校がそれぞれ寮歌を紹介した。記念大会とあって特に日本女子大学コーラス団の特別出演もあつてすこぶる盛会であった。

私共は創立八十周年記念の余勢を駆って旅順工大予科、旅順高等学校との共演で出場して大いに氣勢をあげることができた。本当に今年は私にとっては記念すべき年廻りであった。

これまでも五年、十年毎に各種の記念行事や万博などが巡ってきにくれたが、これからは節目々々に元気で迎えられるものである。

今度約束ができた平成十年の米寿のつどいが待っているが、更に

西暦二〇〇〇年までお互に健康に留意して頑張ろうではないか。今度の第百回記念の三笑会出席者は次の十四名であった。

帯金鎮一	滝口亀太郎
見原三郎	近藤久一郎
高須 彰	前田知子
河村 亮	(第百三期)
杉江善夫	伏見さつき
松永清平	(第百三期)
磯谷幸一郎	堀田利郎
近藤伊佐男	平山 桂
	(大阪)
	(西沢純三)

五〇期

平成二年秋季同期会が十月二十二日(月)十八時からR・プラザで開かれ、会員十二名が出席した。次回は平成三年四月二十二日(月)R・プラザ改修工事の為会場未定、いずれ案内します。(梶原)今回幹事をやってみて、永田の苦勞がよく分った。返事ない者が四名いた。

(益田)昔のひっきりだけの仕事、週五日弁理士会に出ている。(丸尾)東方学園第一高等学校長をやっている。若い人とフォークダンスができ快過。

(大庭富)今月初めシンガポールへ出かけた。淡路島位の国土に、

中国系を中心に、二七〇万人いる。マンション一戸五〇〇万円位で手に入る。街は頗る綺麗だ。

(田中) 意外に忙しい。町内会長として街を見廻っている。お祭りの寄附集めで大きなところが案外しぶい。日に一時間歩いている。

(山田) 只今買い場と株に夢中、一番美人のいる店を探して取引している。ペルー藤森大統領に対し外務省はじめ冷たい。「いつの日か同じ顔の人が立つ」の神話でインディオに人気。中近東情勢見通し難、一部の人で財産独占、女性蔑視など問題は多い。NHK市川昭介カラオケ教室はよい。年寄とは附合うながモットー。

(浅賀) 囲碁プロに脳の病なしとさく。五月末手首骨折。ビタミンCとDの大切さを知った。テニスは週二回、水泳とサイクリングで身体を鍛えたい。

(峰田) CSEとACF二社と関係している。月三回スポーツクラブでトレーニング、月曜はヨット。

(住) つき合うグループ多過ぎて忙しい。孫娘十八歳明大生を預っているが、リズムが狂うところあり。地域の人と解けこめないのはユダヤ人と日本人。アメリカの麻薬禍はひどいらしい。

(大庭左) 五〇期会には学者系の人が多い。易しい話を難しきう。「人類とは何ぞや」「あらゆる動物から人類に非ざるものを引いた残りだ」と。

(仁科) 我々は昭和五年静中入學、六十年経った。戦争はじめ色々な困難をのりこえて来た。現在末娘夫婦と同居、幸せだ。

(永田) 昨夏眼病以来、テニスに遠ざかったたりで足腰痛く体調整わない。今ソ連沿海州で一番人氣のある小断は「連邦から独立したら、日本に宣戦布告し、翌日無条件降伏して占領して貰う。これが豊かな生活になる早道だ」と。

・欠席会員の便り
(梅村) 耐震関係の仕事で千葉県に出かけ欠席、今夏三人の同級生を失い、身辺寂しさを感じます。

(川森氏令息) 元氣衰刺と老後を楽しんでいた父ですが、二月末脳こうそくで倒れ、目下入院中。

(久保田) 昨年一月脳こうそく、目下リハビリ中。昼食会なら出られるかも知れない。

(松崎) 自宅で病氣療養中。
(村瀬) 医者より夜の会合出席を禁じられている。

(篠原) 体調思わしからず。
(一) 令夫人の看病のため欠席。

(勝又・佐野) 欠席通知のみ。

中小企業主は口を開けば「人手不足」と言う。大企業の本社には人が余っている。不運にもよい上司に恵まれず、潜在能力を蕾のままにしている人。これに眼を向け大いに手腕を発揮して貰う。賃金体系等正社員には向かないが、仕事を限定した年俸制契約社員としてみたかどうか。又、人手難は経営合理化へのチャンスとして捉える。その他フリーアルバイターの活用等、人が足りないのではなく知恵が足りないとい積極的に立向いたものである。(永田 激)

五一期

いつか今年も間もなく年末年始のことを考える頃となりました。会員の皆様にはいつもながら御元氣のことと思います。

さて私共五一回卒業生は例によって春秋二回「五一会」として東京と静岡に集っておりますが、今年度春には、四月六日東京築地の「スエヒロ」で開きました。集まった同級生は昨年の十四名より多く後記の通り十七名でした。都合で参加できなかった会員には御承知の通り次のようなお知らせをしておきました。

「例年になく早く咲いた桜もす

っかり散りました。会員の皆様には其の後も御元氣でお過ごしのことと思います。さて、去る四月六日(金)行いました東京五一会には静岡方面からの四名を含み十七名が集まり盛会で、閉会が夜の九時半近くになりました。仕事又は健康の御都合で参加できなかった会員の近況を同封しました。そのま

ま転記しましたので各人の御様子がよくわかると思います。では呉々も御自愛の上来年はぜひお出掛け下さい」

なお秋の会合は十一月十七日例年通り静岡の三笑亭本店で行われます。(原稿締切の都合で将来のこととして記載しました。御了承下さい)

四月六日の出席者は左記の通りです。初めの四名は静岡方面からの方々、順序は概ねアイウエオ順としてあります。

遠田毅、狩野安彦、牧野三郎、丸山雅生、芦田正之、大富部国男、下山富太郎、寺尾利男、永井五一郎、難波悦朗、林盛次、原崎都平、広瀬毅、藤田修二郎、宮野守信、森弘、佐伯正剛、以上の諸君でした。

(佐伯正剛)

五五期

平成二年四月二十一日、卒業五十周年の五五期会が静岡駅南口の静岡ステーションホテルにおいて開催された。恩師の諏訪卓三先生においでいただき、出席者は五十二名、関東同窓会からも九名が参加した。

次いで、平成二年度の関東五五期会が、十一月二日午後六時から、いつものとおり新宿区荒木町の「山宮」で開催された。

この会は初めてという野中篤君や、十余年ぶりだとの峰田勝君の出席もあって賑やかに歓談、小田原の中田千束君など遠くからの出席者も多いことから八時きっかりに散会した。

出席者は次のとおり。
相川富士雄、木村康宏、辻弘、武井富夫、戸塚正五、長澤栄一、中田千束、野中篤、法月重雄、日比光明、峰田勝

(相川富士雄)

五九期

今年の秋季同期会は福島県出張の帰路駆け付けた奥沢君を加え、計十五名が恒例の新橋大洋にて開催された。皆夫々に廻りの席の人々と旧交を温め会話をするうちに

例により各自の近況報告が始まった。中学時代を懐かしんでの思ひ出話や、現在の職業を通じての生活振りを、種々興味深い話とびだしてきた。各々が工夫して健康を保ち、生活を支え、元気に活躍している様子が窺われた。

私の隣りに座わっていた青木(豊)君は会の途中からスケッチブックを取り出して、盛んに廻りの人々の似顔を描き始めた。彼は現在女子大学で建築構造学の講師をして居り、一組五十名の学生の名前を、その特徴をスケッチすることによって全部覚えてしまっているの教授を驚かせたとのことであった。絵は五年前から始めたそうである。事に当って受身でなくこの様に能動的な姿勢が若さと健康を保つ秘訣ではないかと思つた。

癌研究の大家三輪ドクターの話も興味深く伺つた。六十五歳以降を元気に過ごすためには、先ず脚腰を鍛錬することが大切との事。又同ドクターは、六十歳以降三年を目処に生活設計をたてその都度新たな気持ちで自分自身が納得出来る生活を進めて行くとの事。これ等の話を聞いて非常に参考になった。奥沢代表幹事から同期会を現在のように年二回開催するにあつたの青木(静)幹事のご苦労

に対しねぎらいの言葉があつた。

又同君は以前よりアスレチッククラブにご夫婦で入会して水泳等を楽しまつ健康促進に努めて居る由、幹事をやると頭が呆けないよとつけ加えた。一人でも多くの友人を持つことはそれだけ自分の財産が増えたことになる。友人を大切に知己を増やすことの重要性を強調した。

会の途中で記念写真の撮影があつた。これは偶然にも同時に大洋の隣り座敷で行われていた静高六六期の同期会メンバーの協力によるものであつた。

会は終始和氣に満ちた雰囲気の中に包まれて進み、最後に岳南健児の校歌を全員で斉唱、九時過ぎに散会となつた。

今日は本場に有意義な会に出席出来たという充実感に満ちた出来た。今後とも出来るだけこの様な会に出席し多くの友と接触をはかりその中からこれからの人生を生きて抜いて行く力を養いたいものと思ひつつ、帰途についた。

出席者は次のとおり。

青木(静)、青木(豊)、奥沢、小沢(武)、小沢(将)、小花、狩野、川田、藤川、長谷川、原、増田、三輪山口、曲淵

(曲淵景敏)

六一期

関東地区の61期同期会が9月29日銀座キャピタルホテル新館で開かれた。61期同期会は20年前に市ヶ谷で開かれて以来久しく途絶えていたのであるが、関東支部61期代表幹事の太石次男君が今春の静岡での同期会の折、在静岡の加藤光成君、望月良君、渡辺三四二君等の激励も受け、7月12日同キャピタルホテルにて太石次男、安原徹治、浅野徹治、黒川泰三、奥野泰助の5名が暫定幹事となり準備打合せを行い、会場も大石君の勤務先「はとバス」系のホテルで便宜を計っていたが、久しく懸案となつていた関東61期同期会の集いが実現されたものである。

当日は台風20号の接近にも拘らず、在京同期生57名中27名と静岡本部から加藤光成君以下5名の特別参加をいただき、先ず記念写真の撮影の後、前代表幹事安原君の同期会の今日に至つた経過報告、開会の辞があり、次いで静岡本部と静岡本部での第一回同期会が昭和27年に開かれて以来、来年は40回目の記念すべき同期会となる等の紹介があり、静岡より特別参加の萩原辰雄君の音頭による乾杯に

て幕明けとなつた。

当日の参加者、静岡からの特別参加者は次の通りであつた。

(敬称略、アイウエオ順)

青島正和、浅野徹治、伊藤久、稲森慎二、宇都宮道雄、大石次男、大村富士男、奥野泰助、河合純四郎、黒川泰三、小久江浅二、佐野剛、清水四郎、清水照彦、末吉晴夫、鈴木孝、相馬孝、高村岳夫、坪田昭三、富永辰典、西田駿之介、萩原将弘、浜田茂明、巻田英一、諸田実、八百正和、安原徹治

(特別参加者)

加藤光成、萩原辰雄、望月良、吉本通義、渡辺三四二

今回参加出来なかつた諸兄に今回の参加者の顔ぶれを見ていただいた、暖き友情の交換をお知らせし今回の参加を是非お待ちする。

今回の関東地区61期同期会が久方振りに、しかも盛會裡に再開出来たのは、一重に代表幹事として万事に互つて尽力を頂いた大石次男君の熱意と、悪天候の中を静岡本部からおいでいただいた加藤光成君以下5名の諸兄の強力な暖かい御支援によるものであり、ここに改めて深甚の謝意を表します。

(奥野泰助)

六四期

今年の同期会は、世話人の、名

波倉四郎君が、日本ライオンズクラブのガバナー（日本代表）に選出され、アメリカへ行くために、特別に日程を変更して、六月二十九日、新橋、新橋亭にて開催した。六十歳還暦の年という事で、未だ一度も出席したことのない友へ誘いをかけたが、残念乍ら出席はなかった。唯近況が知れて嬉しかった。静岡より近藤昭蔵君上京され六月四日の静岡での会合の模様を静岡弁で語りふるさとを想い出させた。渡辺素夫君の司会で、各々の近況報告あり、久しぶり出席の武田英夫君のヤミ市英語がその後の生活の糧となった話。鈴木明郎山下啓也、山本和彦、仲野実、新井彰、増田誠男、猿谷秀雄君等の報告あり、何れも風雪を耐えた人生の歴史に感銘をおぼえた。

増田政雄君の話は、過日子息と孫達で還暦祝をしてもらった事、私の六十年とは、戦争で白い米を食べられなかった青春時代が原点で、世界中に三度の食事が満足に出来ない子供が一杯いる、何とか腹一杯食べさせられる世の中にしたいという気持が共産党に入った訳。

ゴルフの集いも早いもので、今年で一〇年になる。この間二度行った年もあり十一回の開催となっ

た。毎度六六期の安田正弥氏の御協力と秋山義明君の努力で、東京静岡合同で実行しているが、第一回は八人しか集まらなかった。途中人数不足で、息子や娘を参加させて何とか、しのいだ年もあったが、この一、二年は五組二〇人がちどころに集まり、この盛況を



見るにつけ継続して行くことの大切さを痛感する。優勝は伊藤政彦君、二位佐野旭君、三位風間政彦君、ブービーは、今年正月突然の病で倒れた岩本吉雄君再開第一回目、無事十八ホールを完了。パーティ一席上、稲森照男君が「親しい友達と一緒にティイグランドに遊ぶ喜びを大事にしたい」と挨拶

した事が一番印象にのこった。何はともあれ、同期の友の元気な顔を見ることが何よりの楽しみと喜びである。本年も無事終る。

（野沢正憲）

六七期

汽車通生（西部）同期会

不意に四〇年前を思い出させる、それはそれは懐しさを誘う案内状であった。増田智一君、光木徹君の連名による、六七期汽車通生同期会開催の案内である。汽車通生には存分の思い出と懐しさがある。行動を共にし、哀楽を共にした汽車通仲間には妙な連帯感があるその仲間が集まり、懐旧談を語り合う情景が臉に彷彿する。会場は「かきや」だ。温顔の「かきや」（静岡市安西）の主人、影山誠君の面影が、臉を過ぎる。随分集まるだろうな。案内では、三〇人余りの仲間がいるという。久しぶりに旧友と逢える嬉しさと期待を秘めて10月13日定刻五時「かきや」に滑り込んだ。会場に入って一瞬戸惑った。少ない。受付の増田君に聞いてみた。十四人だという。半分以下だ。淋しい思いが走った。皆多忙なんだ。あと少しで六十歳に届く年齢である。それぞれが、いろいろな業界でリーダーシ

ップをとりながら獅子奮迅の活躍をしているに違いない。会場の諸君は、その忙がしい最中、僅かの合間を見つけて駆け付けしてきたのだろう。私は名を言い、ご無沙汰の挨拶をして空き席に坐った。隣席は川上剛二君で、向かい席は鈴木伝勝君であった。共に東京人である。二人は今夜中に東京へ帰るといふ。

増田君から幹事挨拶があり、新趣向の同期会開催に至る迄の経緯が報告された。次いで順番に、近況や汽車通時代の思い出やエピソードを交えながらの自己紹介が続いた。皆雄弁巧辞である。最後を光木君が締め括って乾杯となり、関根和郎君が発声の音頭をとった。宴会が始まって間もなく、あの「山政」の総師、山口政市郎君が遅れて入ってきた。会社関係者の慶事に出席してきたとの事。やあやあ、嗚呼懐かしい素振りである。十五人となった。影山君も入って記念写真が撮られた。杯を重ねる事二時間余りを、皆が皆席を廻り語り合った。それにしても皆の記憶力の逞しい事、忘れっぽく愚鈍な私には恰も始めて聞くような事ばかりであった。宴会の最後は恒例の校歌斉唱で、第一節を二回唱ったあと、長嶋諒君が一本締



めで締めた。

田町で、法月郁雄君が経営する「庄兵衛」が二次会の場となった。偶々梶原由三君が先客で来ていた。両君も加わっての乾杯のあとは、又々思い出話や近況話、友人の消息話などに花が咲いた。こういう楽しい雰囲気の時、時間の立つのが早い。東京行の最終が迫った頃、漸くお開きとなった。今日は西の汽車通だけが集まったが次回は東の汽車通仲間にも是非声を掛けようという事になった。少年時代の仲間とは気を置かないで語り合えるから、兎に角明か

るく楽しくて気分がいい。唯「せめてこういう集まりの時だけは頭を下げなくていいと思っていたのに、矢張り頭を下げなければならぬ」と、満面に笑みを湛えながら零していた商売人山政の喜ばしい悲鳴が耳に残った。

出席者（アイウエオ順—敬称略）
（用宗汽車通）太田雄造、小野田和弘、鈴木伝勝、関根和郎、中村宏、長嶋肇、原崎恵三、増田智一、光木徹

（焼津通学生）岡村英二郎、川上剛二、桜井正治、松永嘉郎、山口政市郎
（島田通学生）影山友安
（岡村英二郎）

六八期

秋もたけなわと言いたところ、まだまだクーラーが欲しい10月18日、68期関東同期会が、約2年ぶりに銀座のレストラン高松で開催された。

集った岳南健児は37名。その内には38年ぶりに顔を見せた「ヘンちゃん」こと鈴木国功君を始め、鈴木満郎、武光康之の諸君が、一際目立った。

吉崎英輔君に至っては、赴任先のシンガポールから駆けつけるといふ熱心さであった。

会は磯西洋君の司会で、2年間に逝去された同期生の冥福を祈つての黙禱から始った。

高橋俊見君の音頭での乾杯のあとは、会場のあちらこちらで「やあ久しぶり」の歓談が始った。

55年以上も人間をやっていると多少の経年劣化はみんなあるようで、入院したの、手術をしたの、ここが痛いとか、この病気にこの療法や健康法が良いのとか、10年前、20年前には考えられない風景が見られた。

しかし、それはそれとして、いつしか40年前の「悪ガキ」時代に戻って「オレとオマツチ」のやりとりとなった。

静岡からワザワザ出席した菅野68会会長や大石68会事務局長からの母校の最新情報には、みんな熱心に、母校の活躍ぶりを聞き入っていた。

ベナルティとして38年ぶりに出席した3人の話には「もっと熱心に出席しろ!」とのヤジがとぶ。

吉崎君からは、シンガポールから何故出席出来たかの裏話、時のたつのを忘れて、話の花をあちらこちらで咲かせていた。

歓談つきないところであったが菅野君の音頭で、校歌、追遠歌を二度、三度全員で肩を組みながら

歌い、小林功典君の手じめで、お開きとなった。

久しぶりに開催した68会であつただけに、雰囲気も盛り上り、次

回想・随感・近況など

昔を回想して

43期 坪 晴行

久々に西沢兄よりのお便りに接し、感無量です。眼をつぶって、懐しき昔を思い出してみました。

小生の父は、昔の宮内省帝室林野局の官吏で、転々と引越を繰り返して、御料林廻りをしました。

そのために、私は日光の小倉山で産まれ、日光から千葉県の大多喜町に転じて、数年後には、その小学校に入学し、三年生の時に静岡県駿東郡の小山町に転校しました。その後は、静岡市の中学校から、同市の高等学校に進学しました。大学は東大医学部で、引越した次第。卒業後は勉強の為内科の教室に残りましたが、時勢の変化で、その後は上海の居留民団立病院に勤務させられた次第です。

然し、日支事変の戦局が進み、私も現地応召にあつて、南京の防

回の会合には、本日出席出来なかった諸君を、ぜひとも誘つてこようと話し合いながら、各々帰途についた。（雨宮明生）

疫給水部に軍医として、数年間勤務させられましたが、敗戦引揚となつて、上海で船待ちをして、無事に、帰国いたしました。これより先に、上海や南京地区の居留民の家族は、一足先に、日本内地に強制引揚げさせられていたので

す。内地に引揚げた私は、神戸より東京に移りましたが、数年後には、水戸の旧制高校の跡地に出来た国立水戸病院を運営し、改造し勤めて来しました。現在私は既に七十九歳に達し、約十年前に病院長を退官しました次第です。皆様に拝眉の折もあらばと、楽しみにしています。現在では、自宅の前の家庭菜園に熱を入れて元気でいます。皆様の健勝を祈り上げます。

誤解に埋もれた

熱帯林問題

48期 高須 寿

国際的に各種の化学物質による

汚染公害が深刻になってきた。それにつれ地球環境保全に世論の関心が俄に高まった。同時に熱帯林を巡る問題が重視され始めたが、遺憾なことに、この問題は長年、誤解に毒されてきた。その後遺症の影響で、国際的論議は熱帯林問題の核心に迫っていない。それらの誤解の原因は、人間は農耕文化に入つて以来、森林を開墾しないと生きられなくなったこと、歴史的に開墾による失敗を懲りずに繰り返してきた蔽蔽な事実を忘れているからである。

熱帯林および土地の荒廃問題に取り組み始めた切っ掛けは、一九七四年に調査したマダガスカルにおける放牧地荒廢の凄まじさと、それに対する同国支配階級の問題意識の欠如だった。アフリカの事情を見て、熱帯における放牧は国家的自殺行為である、と思ひ、マダガスカルを「転落途上国」、エチオピアを「骨と皮の国」と報告した。その後一六年、荒廢に伴う氣象災害の厳しさは予想を遙かに越え、飢饉地獄の惨状はしばしば報道されている。問題発生経過は異なるが、東南アジアにおける焼き畑問題も由々しき段階にある。古今東西を問わず、森林の被害は木材利用開発に始まった。しか

し、森林を抹殺したものは常に食糧を得るための開墾であり、燃料材採取だった。森林消滅の害は長い時間的遅れのと、問題が膿みきってから底辺社会に吹き出てくるのが常だった。更に、その事態に為政者が目を閉ざして、手遅れになった前例が古代から非常に多かった。熱帯圏における事態も同じ道を辿っている。

二宮尊徳は「開墾は森林と人との対立である」「農耕は森林との調和を保て」と治山治農思想を説いた。熱帯林を巡る問題は治山治農の崩壊である。この現実を無視しては熱帯林問題は語れない。

一九六〇年代に、フィリピンなどでは木材利用開墾が盛んになった。たまたま、戦後における人口爆発により発生した夥しい数の難民の津波が押し寄せた時期と重なった。木材利用開墾跡地は願ってもない開墾対象地だったので、難民はそこに殺到した。そこで、木材利用開墾が熱帯林抹殺の罪を全部かぶり非難された。しかし、森林に歩道めを刺したものは開墾だった。

人口爆発の落伍者である難民は生きるために熱帯林の開墾に走らざるをえなかった。しかし不幸にも、熱帯の厳しい気象条件は畑作

の維持にとって、厄介な宿命的問題となって立ち塞がっている。そのようなことで、貧農は森林／林を次ぎ次ぎに使い捨て、自ら窮乏の袋小路に追い込まれ、貧困と熱帯林激減とが悪循環に陥った。その悲惨な事態が回り回って都市におけるスラムの膨張に繋げる。

熱帯圏における現状のように荒唐事情が悪化すると、緑の復興は木を植えればすむ、ものではなくなった。それは二宮尊徳が説き、かつ実践したように、農業の安定ひいては民生の安定を挺にして、森林復興をバランスよく実施しなければならぬ。

そうした現場における実態を見ずに、国際世論は「熱帯林破壊、日本が元凶」と、わが国の木材貿易に誤解にもとずく非難を浴びせるばかりで、真の原因を理解しようとしなない。

確かに、熱帯林開墾は賢明ではなかった。それについて日本を非難するならば、同時に、他の先進諸国がアフリカにおいて何をしたか？ 現在、アマゾンで何をしてるか？ を論じなければならぬ。しかし、その論争は基本的な誤解の解消には程遠く、緊急を要する極貧層の救済、熱帯林復興には、何の役にも立たない。

誤解は世論の問題意識を麻痺させ、対策の促進を阻害する麻痺である。これを放置すると、熱帯圏の治山治農復興は手遅れになる。この誤解を解消させたいと、私は「誤解に埋もれた熱帯林問題」を去る七月に自費出版した。

森林は開墾により地上から姿を消すが、人間の生命を支える食料生産の場を与えてくれる。ところが、熱帯では、強烈な陽光と豪雨は森林にとっては限らない恵みであるが、裸地化した多くの畑地や放牧地にとっては恐るべき破壊力になる。特に激しい豪雨は土壌を流亡させ、数年ならずして土地を不毛化させてしまう。(熱帯に適した耕法は、水田、樹芸作物園などのように地温の上昇と土壌の流亡を防ぎ易い形態である。畑作はいろいろの条件が整わない限り、その継続は困難である。なお、熱帯では放牧は厳しく抑制しないと救いの道はないだろう)

さて、熱帯林復興の目標規模は私が主張してきた少なくとも五億ha、それと符号するように昨年世界環境相会議(※)で採択された大造林構想、すなわち二世紀初頭から毎年一〇〇万ha(日本の国土面積の約三分の一)ずつ熱帯林を純増させる構想である。

(これを四〇年余り継続すれば五億haになる)(※、一九八九年十一月にオランダで開催)

どんな土地でも、森林の復興は金と歳月をかければ可能である。しかし、荒唐が進み過ぎれば、造林が社会の活性化に貢献するまでに百年以上かかり、社会的要求に間に合わない。実質的に手遅れになる。

治山治農実践の姿はわが国の農村には必ず見られ、そのうち畑作農村の代表的な例は埼玉県所沢市近郊の三芳町である。これを手本に、地球環境修復の一翼を担って、熱帯の治山治農を旗印に、大造林事業を実施することが必要である。どうか、この問題に関心を寄せて戴きたい。

静岡の万葉を歩く

(その一)

51期 原崎 郁平

なつかしい駿府城は今は公園になっている。城址の西側を入ると左に児童会館があり、その前庭に万葉集の歌碑がある。

しろがねもくがねも玉も

勝れる宝 子にしかめやも

山上憶良(巻五―八〇三)

揮毫は静岡の有名な書家青山於

菟先生の手になるもので、昭和37年に建てられている。高さ約二米、幅約三米、特製のセメントづくりの堂々とした碑である。古代の夫婦が赤子をあやしている像が右肩に彫られ、左側にこの歌が刻まれている。碑裏には「瓜食めば」に始まる長歌とその反歌であるこの歌を読み下してある。後に続く言葉の後の方に「われわれ日本民族の血潮の中に脈々として流れるいつくしみの情が、春の潮のようにひたひたと四つの海にひろがるならば、世界の平和も人類の福祉も期して待つべきものがある」と結んである。まことに子は何ものにも勝る宝であるが、それは大切にしまっておく宝ではなく、磨かなければ光らない宝であろう。いかに磨くか、これが「いつくしみ」の発露ではないだろうか。

建碑は昭和37年11月となっているが、そこに建碑者の名前が書いてある。

静岡市馬淵町九丁目

喜寿翁 大石徳四郎

古稀嫗 妻 四女

この名前を見て驚いた。私の静中時代の親友大石憲一君のご両親ではないか。彼は独り子だったが、過ぐる太平洋戦争に従軍して戦死した。ご両親の歎き悲しみはどん

なに大きかったであろうと胸のつまる思いがした。

大石憲一君は秀才で、いつも彼から色々なことを教えられた。

彼の家に遊びに行ったり、彼も私の家へ来たりした。彼は四年修了で当時の難関東京商大（現在の「橋大学」）に合格した。年に何回かの休暇に静岡に帰って来ている時に会って、大学の様子や東京の印象を話してくれた。ある時、二人で自転車に乗りながら大谷海岸へ行ったことがある。その途中で

彼は「今、僕はヘンデルの音楽に親しんでいる。それもオラトリオ・メサイヤだ。あれを聞いていると魂がゆさぶられ、勇気が湧いてくる。君も聴いたらどうだ」と話しはじめた。今まで色々つき合ってきたが、音楽を話題にしたのは初めてであった。その頃、私は教会に行っていた関係もあってキリスト教関係の音楽に興味を持っていた。讃美歌の中にはメサイヤからアレンジした曲もある。私は嬉しくなつて、メサイヤの中の好きな曲について彼に話した。彼は目を輝かせていた。

それからどうした訳か逢う機会が遠のいた。戦争は激しくなる。私も軍隊に入隊し、終戦後はごたごたにまぎれて忘れられるともなく

無沙汰した。戦後友人から大石君が戦死したことを聞いた。

私がこの歌碑にめぐり逢ったのは、戦後30年近く経ってからである。私は碑を前にして若い日の大石憲一君を想い出し、涙の出るのを止めようとしても止まらなかつた。碑と一緒に訪ねた妻は、私が涙をふいているのを見て不思議そうに顔でその理由をきいた。

ベルリンの壁雑感

60期 大石 隆一

一九九〇年九月の第二週にヨーロッパを旅行して来た。ベルリンの変わり様を直かに見たかったことと、スイスの観光が主な目的であった。まずベルリンへ飛んだのだが、その飛行機がPAでなくルフトハンザが出資して新しく設立したユーロベルリンという会社のもので、四年前に行った時のようにフランクフルト・ベルリン間の別料金を支払う必要はなく成田・フランクフルトの料金でベルリンまで行けたことが最初に経験した変化であった。以前からベルリンは占領地区ということでドイツ各地からPA・BA・AFなどが運行しており現在も続いているが、10月3日のドイツ統一を前にして変化は着々と進んでいたのである。

翌日早速ブランデンブルク門付近へ行って見た。以前は展望台の上から壁越えにのぞき見るように東側を眺めて壁の存在を実感し東西の隔りを永遠のように思っていたのが、西側の壁は全く姿を消して、その跡は地面のコンクリートの色の違いでそれがあつたと判るだけで、人々は自由に東西間を歩き廻るのである。取り残された東側の壁はまだ所々に無惨な姿を曝しているが、それも傷だらけ穴だらけで破片を採取しようとする人がハンマーを振るっている。露店ではソ連軍の帽子や外套を売っている。四年前にはフリードリッヒシュトラッセ駅の検問所で強制的に東ドイツマルクに両替させられ、一日ピザを貰い鉄砲を持った兵隊の前を通過して緊張し乍ら東側へ入ったことと比べると文字通りの隔世の感である。人々の自由な意志を政治形態の違いによって物理的に分断していた壁とは一体何であったのか、壁を越えようとして多くの人々が殺された事実をいつまでも忘れてはならないと痛感するのであった。

我々の年代の人がすべてとは言わないが、多数の人がドイツに対するイメージとして若い時に読んだシュトゥルムの小説やアルトハイ

デルベルクの恋物語、或いは多くの天才作曲家によるドイツ音楽などからロマンチックな感慨を抱いていたように思う。しかし敗戦後のドイツは東西に分断されて辛酸をなめて来た。旧西ドイツの人々は瓦礫の中から立ち上り懸命に働いて今や戦勝国をしのぐ豊かな大國になった。そして旧東ドイツを吸収合併するような形で悲願の統一を果たした。ベルリンの壁の崩壊はその象徴であった。確かにドイツ各地には良く保存され又は完全に修復された古い建物が多くその景観は到る所にあつて、行きずりの観光客にはロマンチック・ドイツの思いを新たにさせている。

しかしベルリンの壁の跡の旧境界を自分で歩いて壁のあつた頃のベルリンとの対比をいやでも目のあたりにすると、ドイツが現在直面している現実がロマンチックなどとはどうしても思えない。今度のベルリン再訪はそんな感慨を強烈に抱かされたものであった。

安倍川の夕映え

70期 岩崎 修

まだ五月末だというのにじめじめと続いた肌寒い小雨模様の日がようやく終わった。

女房が入院している大学病院の

中庭に出た。久し振りに晴れ渡った東北の空を白い雲がゆったり通り過ぎて行くのを眺めていたら、「何を考へてる?」と草にねころんだままの息子がきいた。この大学を息子は卒業したばかりだ。

「子供の頃のことだ」

「ふーん」と言つて息子は又目を空に戻すと、「僕のか?」と言つた。

「バカ! 自分のだ」と大声を出しそうになったが、慌ててやめた。

私はもう子供のことよりも自分の来し方行く末を考える年齢になっている。そんな父親のことなどまるで分っていない風の仲の態度に腹が立った。子供になんぞ、今はの腹まで頼れるものかと思つて生きていく親位有難い存在はない筈だ。それには自分のことだけ考へて暮らすことだ。子供を老後の杖代りに考える連中のように俺は意気地なしだと思われたくない。まして子供の学歴や職業を自慢にするなど下の下のすることだ。そんな話を散々したあと沈黙が続いたところであった。

「何で親父はそうイキがるんだ」と伴はおこつたが、「今に嫁さんが来て子供でもできてみる、うど変わるか知れたことだ」と私は腹の

中で叫んでいた。それよりも友達や商売仲間の方がずっと気楽に晩年を付合える。そこそこの金さえあれば若い夫婦に氣をつかってオタオタしなくともすっきりした暮し向きができようというものだ。もっともこの国がこのままさして下落もせずに行っている。それらの話だが。私が死ぬ頃迄は天地がひっくり返ることもあるまい。例えあったとしても戦争中にくらべれば、あれ以下にはなりつこないのだから。

本当は伴の子供の時分のことを考えたりもしていたのだが、さっきのあの一言で急に子供のことなど今更考えている自分に白けてしまった。思いは一気に自分の十代に飛んだ。

あの頃はよかった。何がよかったといつて金にまつわる苦労がなかった。金がなくて困っても自分だけの問題だった。金にまつわる人間関係程いやなものはない。金をもらったが最後、仕事は生命と金の交換みたいな様相を呈する。

両の掌を組み合せて頭の後ろにあてがったまま私も目を閉じた。よく今頃の季節は高校の授業をさぼって安倍川の土手に行ったものだった。今頃は仙台とちがって静岡はもう初夏だろ。あの河は実

にやさしい河だった。甲州の山々に近い「梅ヶ島」から「油山」へとたおやかにうねり下って駿河湾に注ぐ姿は、銀糸で織った帯のようになまめいてみえた。河原の砂利が豊富で白く清潔な点も気に入っていた。

河口を見下す徳願寺山の一風変わった姿、寺に登りついて東方に目をやると、富士のくっきりとした姿が中空に浮んでみえる。ここにあたりから安倍川の最も美しい眺めであった。静岡の街が対岸に明るく拡がっていた。

当時まだまだ悔い難い勢威を保っていた結核という病魔に魅入られて、卒業がおくれ高校には人よりも長く残留した。来る日も来る日も、その場に寝ころんでしまいたくなるような気だるさと、まだ試作品の段階だったストマイの激烈な副作用にたえて家に閉じこもっている、やみくもに学校の級友達のことが恋しくなった。人生のスタートがおくれて行くあせりもさることながら、人にうつる病気ということで友人との接触を遠慮する外ないのがあの年頃には一番つらいことだった。それでも、時折訪れてくれる友人達は、「まさかの友」を絵にかいたような人だと感激した。

ところで、こんな仕事をしていると、実に様々なところに出かけることになる。ひどい時は証人をさがしに山陰に行くかと思えば、次の週は気仙沼の裁判所に出かけて、寒さにふるえながらやつとみつめた安宿の一室で書面を書いていたりする。事件という御座敷がつかればどこへでも飛んで行く因果な商売である。そんなこともあって全国の有名な河川もずいぶん見たり思う。がどれも安倍川程に心安らぐ河はなかった。利根川は荒ぶる神を思わせた。安倍川はどうみても、庶民の中に生れ育った清楚なやさしい女性を連想させる。

高崎に縁あって半年程滞在したことがあった。あの上州の真冬の夕暮は今だに忘れられない。虚空を渡る風は得体の知れない巨鳥の吹えるが如く、残照を背にして暗に沈もうとする山々は、青黒く透明に焼き上げたガラス細工を見るようであった。あたりの風景はこの世に生きた上州の人々の暮しの辛さ、厳しさを私におしえていたようだった。あの夕焼の光は身にあたる痛みのように感じた。

安倍川の夕焼はゆったりとしたきめこまやかな進行をみせる。それは光のハーモニーだった。数分置きに微妙に変化する光の技に、アングリ口を空けるような気分で見入っていると病氣も落ちこぼれの境遇もみんな忘れることができた。はるか西、南アルプスから吹き渡って来た河原の風は、上州のカラッ空に劣らず強く冷たかったが、風が鳴っている空の色が違って、駿河湾の暖流のせいか真冬だというのに浅黄がかっているのである。

ほんのりとした黄色は空とあたりの風景を明るく暖かいものにしていて、この空の色を下地にしてい、西岸の山々に沈み行く太陽は持てる術のすべてを尽す様に色彩の混合を次々とくりひろげてみせた、点々と浮遊するはぐれ雲や横になびく氷雲を大道具として様々に色をめる様は、毎年行われている安倍川の夏の花火大会以上にすばらしいものだった。のちに演劇に興味を持ち、舞台にあてて色彩の混合をおしえられたが、冬の安倍川の夕焼はその原型のように思った。

今ようやく人生の夕暮時を迎えようとしている。五尺も掘れば日本史を揺り動かした大事件の数々が掘り出せようという故郷の街に生れ育ち、高校卒業までどこへも行かず過した。義元も家康も瀬名姫もそして長政も、この山河を眺め、思いをめぐらせて生きたのかと思うと、この国の歴史が身近に迫ってくる。

エジプトについて

77期 松永 秀夫

始めて投稿させて頂きます。

このたび約五年半の海外勤務を終え、この七月末に帰国したばかりですが、タナバタ会(七七期の通称)の世話役である加藤君に、丁度良い機会故、何か書けと強要されましたので、海外勤務のことを書いてみたいと思います。

一九八一―八二年とユーゴスラビアのベオグラード勤務のあと、85年二月にサウディアラビアのリヤド勤務を命ぜられ一年ちょつと滞在、翌86年4月にそのままたエジプトのカイロに転勤となり、今年の七月まで駐在しております。

きょうは、標題の通り、エジプトのことを主体に書きます。

未知の国に対する興味は人一倍あり、その昔、中学生の頃 世界史でエジプトのピラミッドなどの話を聞き、いつかはこの目で見た

いと思つたのを記憶しています。

リヤド・ジェッダ・ドバイ等の名前も非常に新鮮に耳に響いたことも憶えています。しかし乍ら、リヤド駐在を言われた時には、さすがに一瞬戸惑いを覚えたものです。何しろ、酒は全く飲めない、

バクチ場・映画の類もなし。要するに通常欧米・アジア等諸外国で

楽しめる娯楽は一切禁止という国柄は一応の常識として知っていたからです。実際、住んでみると、

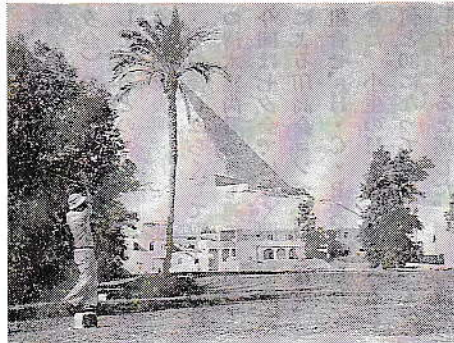
それら俗悪(彼等にとって)に対する禁制の厳しさは、想像以上のもので日常生活に於てかなりの圧迫感を感じました。

従つて、86年4月よりカイロに転勤と言われた時には、ホッとしたものです。エジプトもサウディと同様イスラム教国ながら天国と地獄とまでは言わないが、かなりの差があります。

エジプトと言えば、ピラミッド・スフィンクス・ナイル川程度は誰でも知っているが、一般的には意外と誤つた概念を持っているのではないでしょうか。サウディ・

クエート等と同様砂漠ばかりで年柄年中熱い国と考える人が、かなりいると思います。

広さ一〇〇万Km²、日本の約二・七倍の国土のうち、確かにその97%は砂漠ですが、エジプトを縦断するナイル川の兩岸は農耕地帯



となつており、又、カイロを起点とした地中海までの広大なデルタ地帯は一大穀倉地です。そこにはナイル川から引いた運河が縦横に走り、米・麦は勿論、各種野菜・果物・綿花など一年中青々としており、目を見張るばかりです。

前述の如く、誰もが想像するようには熱砂の国ではあるが、年中暑いという訳ではなく、日本と同じく四季もあります。11月から3月まではかなりしのぎ易く、特に12月・2月は気温もかなり下がります。夜間は暖房器具も必要で、日本から電気ゴタツを持って行っている人もいます。

4月に入るともう夏で三年程前4月下旬に摂氏45度前後の日が一周間も続きました。6・8月はさすがに暑く、40度前後は普通、37・38度だとそれ程熱いとも思わず日本の30度よりもはるかに過し易く感じます。やはり、湿度がそれだけ少ないということでしょう。

3月頃には、日本の八重松のようなピンクの花が木々に咲き、夏に入るとすぐ、街中の火炎樹が真赤に染まり、又、夏の間にハイビスカスの如き熱帯性の草花が咲き乱れ、本当にきれいです。尤もカイロの街自体は、決してきれいとは言えません。というの、カイロは人口一千万とも言われ、エジプト全人口の25%と極端に集中しており、車の洪水で騒音と排ガス・砂ボコリ・ゴミが混然一体となつており、全く圧倒されます。雨と言えは年々に3・4回、それも1・2月頃だけであとは全く降らず、いつも晴天ということも街がいつも何となく埃っぽい原因でしょう。

サウディとは違って、エジプトはクレオパトラの時代からビール・ワインはあり、勿論今でも全く自由です。(因みに、ビールはエジプトで世界で初めて作られたと言われている。)例のクフ王の大ピラミッドは、カイロ近郊(車で30分)にあり、そのすぐ真下には緑のゴルフコースがあり、又、カイロ市内、ナイル川の中洲にも同様の緑のゴルフ場があります。両方共、9ホールですが結構楽しめます。雨の心配が全くいらないので助かります。

その他、エジプトには興味ある古代遺跡が数え切れぬ程あり、又本当に透明で、世界でも有数の珊瑚礁がある紅海など、見るべき所はいっぱいあります。仕事の事、辛い事を忘れて、今、思えば本当に楽しい事ばかりですが、紙数もかなりオーバーしましたので、この辺で終りにしたいと思います。又、機会があれば、いつか続編で。

(兼松 海外部中東・アフリカ室勤務)

江の島会

第43回江の島会が9月2日新装なった、江の島恵比寿屋で開催された。

今年は江の島会育ての親の村松直会長(42期)が7月11日に逝去されるという悲しいことになり、あの愉快な鴨緑江節が拝見出来ないことになったが、故会長の追善のためということもあって例年になく盛り上った会合となった。

総会は、故村松会長のご冥福を祈つての黙禱で始まった。

会は見里得知郎氏(53期)が議長となり、奥沢徹氏(59期)の司会で進められ、事業、会計報告が行われた。又、村松会長逝去に伴う会長人事については、議長から佐伯正剛氏(51期)を推薦し、満場一致で同氏が会長に就任した。

新会長は、その抱負として今後若い人達の会員が増えて行くので会合を通じて、人生の裏表の研鑽教育したいこと、江の島の祭神は女性なので、女性会員の出席を勧誘したいと話された。

来賓として静岡から出席された石田德行学校長、磯谷育男同窓会副会長(71期)甲木怜同窓会事務局(79期)の各氏から、母校の現況のお話があり、静岡を離れてい

る我々にとって、ホットニュースがもたらされた。

又、関東同窓会の活動状況、関西で静養されていた故村松会長の療養の様子が、関西より出席された平山桂氏（43期）より報告された。

当日出席された故村松会長夫人より、「生前一方ならぬお世話になったし、療養中にも御見舞をいただき有難うございました。又、

平山、志田のお二人には関西での療養中に度々お世話になり感謝致しております。夫は生前、自分は百十三歳まで生きると話していましたが、三十年ばかり早くなくなってしまいました。又、江の島会をこ

よなく愛していました。今後江の島会が、益々発展されることを祈っています」とお話しされた。

その後、懇親会に移り、校歌斉唱の後、野崎操一氏（40期）の乾杯の音頭で宴が始まった。

絶妙な進行役は黒田秀幸氏（67期）で、懇親会のボルテージは高まるばかりであった。

そのハイライトは、井出多米夫氏（42期）の大正15年、母校が甲子園全国優勝した頃の想い出話であり、一同シーンとして感激の場面の話に聞き入った。

校歌、応援歌、逍遙歌はたまた

旧制高校寮歌と続き、宴は時間を忘れて経過したが、ひとまず恵比寿屋さんでの会合は、お開きとなり、会場を恒例の江の島橋の「いそみ」に移し歓談の刻をもった。そして、来年の再会を約して夕日の沈む江の島を後にした。

（68期 雨宮明生）

印高会第二回ゴルフ

コンペに参加して

十月上旬、同期の三浦位通君から連絡があり、恒例の七七期（七夕会）のゴルフコンペを近々予定しているとのこと、一も二もなく参加を表明。

その後しばらくして取まとめ役の清水雅尚君からも連絡があつて今回は七夕会ではなく関東同窓会による印高会コンペとのこと、

組合せ、H・C・P表が送られてきた。小生のH・C・Pをみると何と30になっており正直言つて少し甘すぎると感じた。同期の清水君は28、小長井幸幸君は30となつており、腕前の程が判っている三浦君は26となっている。

実は小生、この七月二六日に五年半振りに海外駐在より帰国。その直後の八月中旬さっそく三浦君達の親戚なアレンジで静岡・菊川カントリーで帰国後初めてのラウ

ンドをしたのだが、除夜の鐘の如き大叩きをして、こんな筈ではなかったと愕然とした次第。

そのあと九月末に松山CCに行き、こども一〇五と大叩き。約四年半いたエジプトのカイロでは日本の箱庭の如き整備されたゴルフ場とは比べるべくもないが、9ホールながらグリーン、フェアウェイともそれなりに芝のはえたゴルフ場で休日には大体プレイをし

現地日本人会でも二度の優勝経験もあつたので、いくら日本のゴルフ場が難しいといつても一〇〇以上叩くことはないだろうとタカをくくっていたこともあり、一度も一〇〇を切れなかったことに少な

からずショックを受けていた。とはいへH・C・P30はいかにも多く、一緒にラウンドした三浦君と同じ26ぐらいにと内心は思っていた（菊川CCでもほぼ同スコアだった）。通常コンペだと初出場は優勝資格がないことが多いが、こ

こではそのような規定もないらしい。連絡役の清水君にも26ぐらいが妥当だと話したが、まあいいじゃないかとのこととそのままになった（どうも清水君は小生は一〇〇を切れないと思ひ込んでいたようである。小生自身、帰国後の実績から一〇〇を切る自信はなかつ

た）。

前置きはこの位にして、コンペ前後は、やはり清水君のアレンジで箱根の保養所に宿泊。久し振りの温泉と豪華な夕食に日本情緒を満喫。昼間からの雨も一向に衰える気配になく、更に小生体調も風邪がなおりかけで余り良しとはいえず、明日のゴルフはなるようにしかならぬと聞き直りの気分であつた。

さて翌朝窓を明けると、雨上りのさわやかな緑と真青な空に明るく太陽がさんさんと降りそそぎ、風もなく絶好のゴルフ日和。仁科光司君などは喜々として一番風呂を浴びに行き、部屋に戻るや、昨夜のたいびさに悩まされ睡眠不足の小生には構わず、四人分の布団

を次々に押し入れにほうり込む程はりきっている。元来寝起きの悪い小生もまだ早いと思ひながらも起きざるを得ず、とはいいつつも仕事を忘れた世界では何となく気分も浮き立つもの。同じく旨い朝食を充分にとり、箱根CCへとタクシーで乗りつけた。

きれいな日本のコースの中でもさすがに箱根の名門コース。スコアに対する不安は忘れて気分も昂揚してくる。東名高速の事故渋滞のあおりでスタート前に若干ゴタ

ゴタはしたが、ほぼ予定通りのスタート。風もほとんどなくボカボカ陽気で本当に清々しく絶好のコンディションである。得てして、こういう時はボカをやるもの。しかし、この日はOBもせず、いつもやるチョロも比較的少ない。グリーンが非常に速くパットナーの連中と同様3パットも結構多いが何となくスコアがまとまり、ハーフをあがってみると46の思いがけない好スコア。H・C・Pを26としても2アンダー。（バー35/35）

通常の優勝ネットほどの程度か判らぬが後半次第ではと思ったのが影響したのがどうか、49を叩きH・C・Pではネット65となる。風呂から上りパーティ会場に行くと予想したとおりのうか、心配したとおりの小生が優勝となつて

いる。複雑な心境だが、この際有難く素直に栄誉を受けることとした。楽しくプレイさせてもらった七夕会のパートナーのお陰であるのは当然である。帰国早々印高会のゴルフコンペに初めて参加させていだいたうえ優勝カップまで

いただき本当に感激の至りです。最後になりましたが、この会をアレンジいただきました皆様方の御苦労に厚く御礼申し上げます。（77期 松永秀夫）

哀 悼

江の島会会長
村松直氏逝去を悼む

四十余年に亘り小学校訓導から高等学校長に至る教職に精勤され十一種に及ぶ教育免許状をお持ちになったまことに教育者の典型と申すべき方で、その功績に対して昭和五十五年勲四等瑞宝章が授けられ、又平成二年七月十一日には正五位に叙せられて居ります。

又江の島会に於ては昭和二十二年発足から四十年間李家・永野両会長を補佐し、又五十六年以降は自ら会長として会の運営及び事務一切を独力で処理して同窓会としての発展に尽力されました。

江の島の村松会長は昭和六十二年御発病の後、箕面市で御療養中でしたが平成二年七月十一日逝去されました。この報せは直に関東同窓会と江の島会に伝えられ、深い悲しみの中に十四日辻堂駅前和田斎場に於て終祭通夜、十五日同じく告別式が神式によって執り行われ、御生前の教育活動を物語る様な多数の教え子達と共に江の島の役員と近隣在住の会員が参列し、静中同期の井出多米夫氏が友人代表として弔辞を述べられました。

会長は明治四十二年富士宮市の生まれで、昭和二年静岡中学四十二回の御卒業、青山師範日本大学を経て昭和四年以降五十一年まで

わくは御霊の安らかに鎮まりますことをを心からお祈り致します。
(53期 月見里得知郎記)

松村博司先生を偲ぶ

54期 磯野 修

わたくしたちが旧制静岡岡県立静岡中学校で過ごした日々は、もう半世紀も昔のことなのに、あの木造の校舎や諸先生・級友たちの当時の姿が、ずいぶんと鮮明に浮かんでくるのは考えてみれば不思議なことだ。

松村博司先生とわたくしたちの初めての出会い、入学式が終ってそれぞれの組にわかれ、今後の学校生活について組担任からの話があった時だった。先生はその前年(一九三三年)四月に母校教諭として就職されていたが、組担任としてのお仕事は、わたくしたち一年丙組五十余人が初めてであった。そのためもあってか、その日は西田重雄先生がつきそい役で出席され、父兄からの質問の半分以上は西田先生が返答されていたように記憶する。現在同窓会役員として活躍している高橋孝三君や、同君とともに西から汽車通学をしていた益頭尚道君も同じ丙組であった。

松村先生からは、一年生のときに国語を、二年生に進んでからは漢文を教わり、四年生の課外受験クラスでは、当時文部省が国民教育用に編集した小冊子『国体の本義』の解釈をうかがった。眉目秀麗の若い先生が、音吐朗朗と講ずる授業は、何か生徒をひきつけるものがあつた。黒板に説明文を書く際にも、特に重要な事項には黄色のチョークを使うなど、ちょっとした事がらをとってみても先生が授業にこめた熱意のほどが偲ばれる。

ただ当時のわたくしたちが、どの程度先生の期待にこたえ得たかは甚だ疑問と言わざるを得ない。たとえば四年生のときの校友会誌(小野尊親君(同君もまた一年丙組であった)の「山を歩く」という一文がのり、松村先生が小野君に「読みごたえのあるのはお前の書いた文だけだ。」と感想を述べられた由を当の小野君から聞き、それでとは改めて問題の文章を読んではみたものの、残念ながらそれが何を言おうとしているのか理解できなかった。学校で二、三の級友に尋ねてみても、事情は全く同じであった。

先生は他の諸先生と違って、いわゆるオウチヤク(またはアンチ

ヨコ、正式名称はもののしくも簡易予習辞書)の使用を禁止されなかったし、「どんどん覚えて、どんどん忘れなさい。ひとつことを後生大事に覚えていることはない。」と言われたが、今にして思えば、それは教科書にのっている短い断片的な文章を逐語的に解釈して足れりとすることなく、教科書以外の大量の作品をどんどん読むことが大切だということであつたろう。そして単に国語の勉強というだけではなく、広く人間形成のための読書を念頭においての言葉であつたに相違ない。そこにまで思い到ることもなく、アンチヨコの使用だけのつまみ食いにとつたのはまことに「忸怩たらざるを得ず」という次第である。

正規の授業のほかにも、先生は郷土研究会の研究遠足や旅行には必ず参加されたし、会誌『郷のかおり』にはよく碑文の解説を寄稿された。そうした半ば教育的なお仕事のほかに全くの雑務についても、新任の国語漢文担当者ということで、かなりの量が先生の肩に降ってきたことであらう。当時のT校長の訓話の原稿は実は先生が書かれたものであることを、ふとした機会に知り、何か大人の世界の一面を覗いたような味気ない

思いに駆られたことを覚えてい

る。
最後に先生にとっては、そうした難務の一つであったろうが、わたくしにとっては特に深く記憶に残っている思い出を記したい。

一九三八年三月第五十三期卒業生の卒業式に、在校生代表の送辞を読む役を、わたくしが仰せつかったとき、先生は実に懇切丁寧に指導された。文章の構成を改め、字句を訂正し、式の数日前には講堂に連れて行って、ここに腰かけているから、こう出て来て、ここでお辞儀をして、包み紙のなかから書いてあるものを取り出して、読み終わったらこうして……と一再生ならず予行演習をさせたりえ、実際に声を出して朗読させ、「もっととゆっくり読みなさい。」と指示された。

さて当日は自分にとって何せ初めてのことであり、極度に緊張したうえ、あいにくと変声期にかかっていたので、読みはじめてみると、練習の時とちがって、自分でも意外なカン高い声が出てしまふ。速度も速いようだが途中からスピードをおとすこともできず、まぢがえずに読み終るのが精いっぱいであった。席へ戻ってやれやれと思いつつながら卒業生代表の島田

良彦氏が、ゆっくりした調子で答辞を朗読されるのを聞いていた。

式が終わってからの先生の批評は、「遠くの入口の方にいたが良く聞えた。しかしやっぱり速かった。」であり、同級生の批評は、「とんでもない声を出したものだ。」であった。

その頃すでに中国大陸での戦争が始まっていたけれども、数年の後は、あの潰滅的な戦争が、先生をも含めてわたくしたち一同の運命を大きく変えるであろうとは知る術もなかった。

松村博司先生は42期卒で、静中教諭から山形高校・八高教授を経て名大教授(名誉教授)になられたが、心不全のため10月30日逝去された。

「栄花物語の研究」で一九五八年学士院賞受賞。それまで研究者が少なかった平安時代の名作「栄花物語」の背景や内容、影響などを総合的にまとめ、高く評価された。

(上杉重吉記)

太平洋戦争中、先生は工兵隊の衛生兵として出征され、19年12月内地を出発、ミシダナオ島を転戦された。当時の模様を「アボの神霊―副題ミシダナオ島回想記」と題して克明に書きつづられたもの

を上梓された。磯野君から拝借し

て読ませて頂いたが、戦闘の苛酷さは鬼気迫るものがあり、文字通り九死に一生を得た思いであったろうことが推察される。

二十年も前だったが、偶然、テレビで講演されているのが目に止まった。昔の面影はそのままで、冒頭、「私は栄花物語の研究をしている」と言うと、映画物語と間違

えられることがよくある」と話さ

れたあたり、昔、生徒に人気のあった先生のユーモアは、少しも衰えてはいないな、と快哉を叫んだ次第である。

磯野君から報せを受けた時、代表して会報に一筆書いてくれと頼んだら即座に引受けてくれた。紙上を借りて御礼申し上げる。(庵原悌次記)

静岡だより

野球部、東海大会の準決勝戦で惜敗

来春の甲子園につながる第四十三回秋季高校野球静岡県大会は、地区予選を勝ち抜いた十六校が参加して、九月二十九日から浜松球場を主会場として開催された。

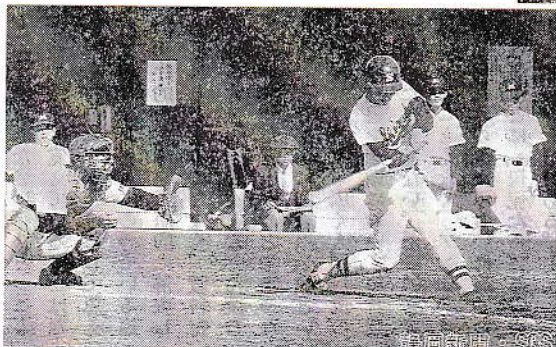
静高は、地区予選では東海大工に苦杯を喫して中部二位となったものの、強力打線を買われて優勝候補に挙げられていた。その前評判どおり、一回戦では一年生向川の満塁アチなど東部四位の桐陽を五―三で下し、続く二回戦では中部五位の清水商に四点を先制されたものの、強打に小技をから

めて十一―四と七回コールド勝ちを飾り、ベスト四入りを決めた。準決勝の相手は西部三位の浜松工だったが、望月正から遠山への継投が成功した上に、持ち前の強力打線も着実に加点して、七―一と圧勝した。これで三年連続で東海大会への切符を手中に収めた静高だったが、手綱を緩めずに東部三位の沼津市立との県大会決勝に臨み、勝負の右横打により三―二で九度目の優勝を飾った。

勢いのにる静高は、十月二十八日から三重県の日市・伊勢両球場で行われた東海大会に出場、一回戦不戦勝の後、二回戦で愛知三位の名古屋一高と対戦した。

静高は初回に一点を先取したものの、六回に追いつかれ苦戦の展開となった。しかし一年望月正、二年遠山、一年西村のリレーで踏ん張る間に、八回に向川のまた九回に望月正、西村のタイムリーで三点を追加し、四―一で名古屋一を振り切り四強入りした。

さて、いよいよこの試合に勝てばセンバツ確定という準決勝、相手は愛知一位でこの大会でも本命とみられている愛工大名電。ともに二回に一点ずつを取り、その後



(写真)

対名古屋一高戦で九回に西村がダメ押しタイムリーを放つ。

安打が得点に結びつかない緊迫したムードのまま延長戦へと突入した。

先にチャンスを迎えたのは、十回表の静高だった。一死から望月薫がセンター前ヒットで出塁してすぐ二盗し、一死二塁と愛工大名電の鈴木を攻めたてたが、後続が封じられて勝ち越し機を逸した。

「チャンス逃すとピンチが来る」という不思議な巡り合わせの通り、その裏に同じ一死二塁のチャンスを受工大名電が迎えた。

バッター鈴木は、非情にも二塁和田の手前でイレギュラー、ランナーが一気にホームに駆け込んで二ー一のサヨナラとなった。

地区予選と県大会では、強力打線が継投策で乗り切る投手陣を盛り立てていたが、東海大会に来てからは、逆にピッチャーが踏ん張って打線の援護をじっと待つという形になり、結局打線のあと一歩が及ばなかった。

東海大会は三位決定戦がないため、準決勝で敗れた三重一位の三重高と静岡のどちらかが第三のセンバツ切符を手中にすることになるわけだが、ともに延長戦の末に二ーで惜敗しているため、判断が別れるところで、静岡のセンバツ出場は微妙な状態となった。

東海大会二回戦

静岡

1 0 0 0 0 0 0 1 2
0 0 0 0 0 1 0 0 0

1 4

名古屋

東海大会準決勝

静岡

0 1 0 0 0 0 0 0 0
0 1 0 0 0 0 0 0 0 1 x 0

2 1

愛工大名電

(85期 吉水 広)

平成二年度会費拠出者

(順不同・敬称略)

平成2年4月1日～2年10月15日

期別

三〇 神谷啓作

三一 塚田英夫

三二 前田鉄三

三五 畔柳安雄

三八 石割正

四〇 野崎操一、伴野三千良

四二 井出多米夫、岩波信平(5)

四四 国分友美、中嶋敏、吉田幸一、坂野隆介

四三 西沢純三、小河直人、三好由三郎、北里良夫、坪晴行、山村忠雄、倉沢栄吉、長戸寛美、

四四 外川誠、中村満夫、臼井茂村井東助

四五 草野哲、須山達夫(10)、田

附敵三、鈴木弥門、佐野理平、石上稔、千葉保次、下川猛、柏木千秋、堀正治、竹下定吉、伊藤敬三、大石清、黒田朋彦、松林晋一、内山規、篠原清、久留武、磯塚倫三

四六 杉山栄一、関口不二夫、杉江敏男、吉見四郎、今関智吉、片山正二、田中達夫、土井知恵雄、野口真、山上信重

四七 黒水高典、近藤希賢(3)、河村祥、興津幸四郎、原崎進一、伏見賢治、青木香、富谷精一、日比野悦三、奥山正、福永正美、高須寿菅沼栄、安本久、直原敏衛

四八 上杉一郎、篠原泰、長井広嶋三四郎、石割敏夫、伊藤徹次郎、伴野徳三郎、石田大二郎、大津英輔、陰山修次、曾根重四郎、山村忠平、梶原忠治、住太郎(3)、永田滋、仁科義郎、梅村魁、一一彦、江川友治、大庭富士夫、緑川俊徳、深沢八郎、大庭左文、丸尾文治、峰田静夫、村瀬重利

四九 下山富太郎、森弘、谷川清田中賢一、永井五一郎、原崎郁平(3・2)、渡辺功、佐伯正剛、小河八十次、林盛次

五〇 川島喜八郎、田中貞司、服部雅雄、広川隆、石野浩一大草知久、岩本良雄、茂呂茂樹、直原澄衛、綾部立一、遠藤照、曾根信一、西田豊馬、一誠、小川善次郎、大石巖(5)、奥野孝(5)、島田良彦、園田芳男(2・2)、谷静夫、徳永悠久、橋本久仁寿、月見里得知郎(5)、山菅幸雄、杉山滋夫、桜井昌也、大橋百蔵、鈴木弘雄、片桐鎮夫(4)、志田寿一、三枝正裕、宮沢四郎、松前新太郎、野崎昌輔、木宮高彦(3)

五一 庵原梯次、細井庸二、大畑忠夫、安東哲夫、川本平八郎、佐野圭司、平林一郎、磯野修、高井昂、篠原範平(3)、柴崎芳三、佐野資郎、鈴木猛、居初良雄、福津三朗

五二 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五三 佐伯正剛、小河八十次、林盛次

五四 川島喜八郎、田中貞司、服部雅雄、広川隆、石野浩一大草知久、岩本良雄、茂呂茂樹、直原澄衛、綾部立一、遠藤照、曾根信一、西田豊馬、一誠、小川善次郎、大石巖(5)、奥野孝(5)、島田良彦、園田芳男(2・2)、谷静夫、徳永悠久、橋本久仁寿、月見里得知郎(5)、山菅幸雄、杉山滋夫、桜井昌也、大橋百蔵、鈴木弘雄、片桐鎮夫(4)、志田寿一、三枝正裕、宮沢四郎、松前新太郎、野崎昌輔、木宮高彦彦(3)

五五 庵原梯次、細井庸二、大畑忠夫、安東哲夫、川本平八郎、佐野圭司、平林一郎、磯野修、高井昂、篠原範平(3)、柴崎芳三、佐野資郎、鈴木猛、居初良雄、福津三朗

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

五五 相川富士雄、武井富夫、長沢栄一、成瀬信男、法月重雄、中田吉信、野中篤、山下武男、中田千束、中野治良、戸塚正五、小沢忠樹、吉川鎧介、松井保治、木村康弘(3)、塚越修、石神庸

本をつくること——

それは生きてきた一つの証

自叙伝・回想録や句集・歌集、また小説・論文・エッセイなど残しておかれたらいいが。

印刷 庵原印刷所 庵原梯次 (54期)

東京都北区上十条4-4-15 電 03-3908-3253

富士通電子デバイス特約店・OA機器販売

東海デバイス株式会社

(旧社名 東海電気工業株式会社)

代表取締役社長 清水照彦 (61期)

本社 東京都目黒区目黒4-6-33

TEL03-3791-1181(代) FAX03-3715-1558

一 青木良文、奥野進、橋本保
二、原田昇左右、横森桂、
高橋四郎、山田隆、石塚由
雄、清水逸郎

六九 奥野泰助、高村岳史、清水
照彦、花見久、君島敏男、
大村富士男、宇都宮道和、
片桐篤、青木邦彦(4)、相
羽達雄、小久江浅二、大石
次男、浅野徹治、萩原将弘
土井正岡、清水泗郎、鈴木
孝、伊藤久、安原徹治、黒
川泰三、福田英雄、八木貞
二、卷田英一、山崎和夫

六八 小林孝光、神谷貞子、松島
玲子、田川邦子、堀場千賀
重、高林蠟夫、堤章、笠井
耕一、福山秀雄、板倉利朗
鈴木浩之、鳥羽山照夫、乾
直美

五七 岩井平一郎、影島利邦、杉
山正友、高橋礼久、米沢正
次、島根光明、富田澄、望
月修、原川久雄

七〇 石山博、岩崎修、大高源之
丞、勝間田保夫、清水令一
郎、関哲男、中馬敏雄、中
村竜二、仁科正雄、八木千
二、味岡宏、村松勝治、佐
々木政之、宮代省一、渡辺
勝美、谷川治弘、調子達郎
小佐野栄雄、松永茂、白石
通子、原田行造、吉田修、
賀知進、河井良夫、牧野甫
井田勝久、川端正良、黒柳
錦也、桜井規順、田中宏志
宮本達司、大村一彦、遠藤
藤弥、清智、大場良臣、
西山信三、野田卓男、望月
泰弘

五八 奥野広、伊藤健三、島村梧
田熊博邦、須山静夫、猪瀬
忠賀、藤森立一、藤田登、
宮崎佐一郎、小山昂之、望
月恵一、安井幸一(3)、鈴
木栄三

六二 六三 白鳥芳夫、海野昭平
真田宗明、塩沢敬、鈴木新
之輔、柴田克朗、三枝弘之
大塩幸男、伊東守、大石一
輔

六九 鎌野悦雄、鈴木敏行、金子
堅司、田中映吾、岩崎為明
稲村不二雄

五九 青山勇、奥沢徹、小花敏郎
川田昭、清水汪、増田真一
近藤陽三、勝呂清、高橋裕
(4)、酒井哲夫、小沢武彦
加藤恵一、菅原操、福原元
一、佐野英一(3)、内田武
二、水野哲也、大塚恒、伊
藤光雄、大村和夫、青木静
男

六四 六五 野沢正憲、浅井幹夫
新井彰、岩本吉雄、加藤満
神谷武男、栗田行雄、佐野
旭、名波倉四郎、永田進一
長谷川直和、益頭尚文、村
上善代二、吉井駿亮、渡辺
素夫、増田政雄、馬場泰男
狩野達彦、山本和彦、増田
誠男、田中耿、塚本光彦、
蛭川博之、松下一男、渡辺
宏一、小林剛、竹内豊、杉
本哲、遠藤栄、仲野実、猿
谷秀雄、鈴木明郎、武田英
夫、八木綱三(4)

六八 雨宮明生、佐野川好母、鈴
木俊彦、高橋俊見、塚本浩
司、野中省三、星野敏郎、
荒谷じつ子、大橋勝弘、酒
井定子、中村隆、伊東良平
大川庄治、市原卓、額額晃
生、白鳥健次、宇田貞子、
田中英夫、杉山忠男、井口
慎、河口浩、植田勇夫、長
谷山頌、鈴木満郎、石川勝
也、磯西洋、武光康之、杉
山和子、望月節、秋元明弘
市来昭二、松下司郎、森下
健(10)

六〇 上杉重吉、大石隆一、笠間
達男、鈴木光男、堤崇、時
田正康、山崎鏡次、柴田正
鈴木明、辻村輝彦、
渡辺博、萩原莊太郎、青木
学、君島康弘、石関忠雄、
満間猛、池上晴介、山本雅
之助、小林金次

六六 河守輝雄、杉村行男、田中
俊男、山下智康、安池智策
山下裕一、杉本幸貞、菊田

七一 片山守彦、矢部正和、後藤
弘枝、海野幸雄、秋田和男
佐藤利治、森川滝太郎、安
藤竜男、青木庄二郎、石川
宏、白井力、浦田彰、実石
欣哉、加藤祐史、小池啓治
友田勲、本間啓司、村松綏
啓、松原徳満、岩崎謙一郎
岩崎剛、篠原直、児玉文
男、下 薫、松隈道雄

株式会社 越 士 富
株式会社 富 士 越 化 成

代表取締役 野 澤 正 憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL(409)3342(代)

TEL(400)9541(代)

建築設計・監理

株式会社 ユニオン設計センター

代表取締役 成 岡 英 彦 (67期)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-14-9 規格ビル

TEL 03-363-8604 (代表)

- 七二 宗野佳郎、深田均、松木茂夫、山口公子、川端正志、前田栄一、種茂雅之、小林文矩、武井正和、夏目雅之、岩下方彦、木原規之、後藤孝子、鈴木雅子、豊田智子、青木俊一郎、山梨由記、松下勝朗
- 七四 松下晴一、諏訪部美恵子、佐藤鐘司、稲葉一守、藤原經史(4・2)、中西恭二、中西健、田中佐智子、内山明夫、佐野捷造、望月徹弥、加藤恒行、萩原茂春、齊藤義文、岩崎匡利、上田貞注、西山肇、花本栄二、山口雅子、山脇伊久男
- 七五 大島崇志、鈴木正孝、石丸信吾、今田肇、佐藤茂秋、洞口和夫、鈴木浩、山岸誠二、塚本平二
- 七六 加藤重信、山内幸太郎、森正毅、大岩蓮、仁科光司、深山源一、栗野吉洲、岡本天晴、遠又英祐、宇野明彦、岩崎敏宏、野方重人、三浦位通、大隅多一郎、川崎卓治、野田治江、小池淳夫、奥山和子、五十嵐誠、加藤礼三
- 七九 太田節一、上田尚亮、君島正夫、島田洋子
- 八〇 漆畑真彦、角谷勝彦、山本洋一、上出和子、入谷健彦、中川武久、中村政彦、八木博、秋山幹男、川村憲明、竹内勤、成沢克彦、福村正亮、深沢直行、増田安久、諸星勝保
- 八一 平口靖則、鈴木真男
- 八二 鈴木良彦(4)
- 八三 浅井隆善
- 八四 田辺哲、河合健一、塩谷立輔、原明生
- 八五 宮城準子、深津俊郎(3)、望月信幸
- 八七 平岩正史、藥科名雄、沢井良輔、高橋宏、細川勝山、野武尚、仁科満寿雄
- 八八 伊藤靖郎
- 八九 荒井千明、荒井郁子、小林一郎、青木佳子
- 九〇 小原裕子、菅沼修
- 九一 川村朱美
- 九二 岡村幸彦、渡辺正孝、望月達也、相田順子、野末英男、大津仁昭
- 九三 安本修身、岡村仁、荻田雅宏、松野敦子、山口道男、杉山弘典、齊藤里美、小池一徳、宮城倫子、矢部竜太郎、中村務
- 九四 落合直樹、加藤光俊、安倍昌宏、酒井直樹、服部智任
- 九五 服部美佐子
- 九六 有吉竜太、宮野豊、米沢みどり
- 九七 飯田力、上田巖
- 九七 天野充、福岡将文、鈴木由紀子、井沢紀子
- 九九 新美広重、河合祐子
- 一〇〇 船橋智、佐藤真紀、五十嵐寧、石井裕
- 一〇二 大石晃生、杉本文洋、山本徳子、梅原章裕、小川統久、望月真希子、成島修、伊藤みき、花村宣昭、石田綾子
- 一〇三 川島由紀、松永学、原田和

「こえ」

気軽に筆を執って
お送りください

- 42 中嶋 敏
だいぶ体力が弱りましたが何とか無事に過ごしております。時々小旅行を楽しみにしております。
- 43 長戸 寛美
月二回の病院通いながら、まずまず無事元気。ただ、足弱なので長歩きができぬのが残念で、自然な楽しみは読書だけということになります。同時進行七、八冊。中に「八大伝」とか「魔の山」「魅せられたる魂」など長いものもあって、大変です。
- 44 奥山 正
卒業して五十七年、運動会の最後に城の攻防戦があり、三八銃でやったのが印象に残っています。現在役立っているのは英語のみ。先生は北井先生が苦米地先生か記
- 45 坪 晴行
私は静中を四年修了し、静高理乙から東大医科を卒業。昭和十四年上海に出征。戦後帰国、水戸国立病院院長を勤め、昭和五十五年以来名譽院長に服しています。現在七十九才。身体は全く元気です。

国際線航空貨物・海外旅客取扱い
運輸大臣登録旅行業代理店業3440号

株式会社・ワールド・エンタープライズ

代表取締役 中馬 敏雄 (70期)

〒105 東京都港区浜松町2-8-9 春原浜松町ビル

貨物電話 434-0591 (代)

旅客電話 437-5861 (代)

FAX 434-5537

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

熱函病院

院長 小坂 博 (67期)

住所 熱海市春日町12-2

TEL 0557-83-3131

憶にありません。昭和天皇の英語の天覧授業玉座の標札は今でも持っています。青春の頃がなつかしい。

51 江川 友治

八月十一日～十八日、京都国際会館で第十四回国際土壤会議が開かれ、外人約千名、日本人約八百名（いずれも同伴者を含む）参加して盛況でした。私は組織委員会副会長として、閉会式で挨拶のスピーチをやりました。

51 下山富太郎

暑さにめげず元気にすごしています。

53 宮沢 四郎

昨年生れて始めて入院したが全快。健在なり。長男、敏、長女、慶子共に適齡期なれど未だ在宅。乞御世話。同窓諸士に宜しく。現在トッパンムーアプロセスの顧問。

54 川本平八郎

定年脱サラで、手打ソバ商十五年。この度、無事に廃業致しました。楽しい思い出となりました。

55 石神 庸一

小生、現在、日仏協同商事株式会社にて、日仏の文化、経済の交流の仕事に携わって居ります。

55 戸塚 正五

歳を重ねるごとに暑さ寒さが身

にこたえるようになりましたが、お陰でまだ元気に毎日勤めております。健康の有難さをしみじみ痛感する次第です。

58 猪瀬 忠賀

会報29号で奥野副会長の「十五年の歩み」を拜読し、時の流れをしみじみと感じました。発足当時幹事をお引受けし、たびたびトッパンムーアへ伺ったこと、また53年夏には東京湾のハゼ釣り大会をお世話したこと等々、思い出いっぱいです。ますますのご発展をお祈りします。

58 田熊 博邦

会員諸兄々御活躍の事と存じます。快適な老後とはなかなか難しいものです。「良識ある社会人」の少き今日、自ら襟を正し、隣人に迷惑のかからぬ様心掛けています。生涯学習のゼミに精出していきます。

59 勝呂 清

皆々様の御健勝を祈っています。総会に時々しか出席できないのは残念です。

61 巻田 英一

病院・医師会など単に忙しくやっていて余り進歩のないのも残念です。

還暦も過ぎると、体力のおとろえの自覚がはっきりして来た様で

す。もちろん、知力の方もボケに近づきつつあるのか、何とか対策をとるためですが、若い頃の様に続ける力がなくなりました。

61 小久江浅二

千葉県南端の館山市に在る、館山病院に内科医として勤めています。サーブス精神を第一に心がけています。

68 松下 司郎

今夏七月中旬より、アメリカ・オハイオ州で車のアルミホイールの工場建設のプロジェクトマネージャーとして頑張っております。

69 板倉 利朗

是非、静岡での同窓会に出席したいと思っています。ご連絡頂ければ、幸甚です。

70 河井 良夫

松坂屋東京本社（所在は銀座）に勤務しております。ぜひお立寄り下さい。

70 牧野 甫

55才の定年をむかえ、関係会社の東レ建設に移りました。東レ時代、大先輩の久留武副社長原野谷理事に大変可愛がっていただきました。静高に学ぶことが出来、本当に感謝しております。又5年ぶりの東京勤務ですので、同窓会にも出席させていただきます。

74 藤原 經史

今年の夏は、格別の暑さです。皆様もお身体にはくれぐれも、ご自愛下さい。

77 大岩 蓮

夏の甲子園に、母校が出れば暑い夏もがまんできますが、最近の状況は残念です。ぜひ早い機会に一度甲子園で「岳南健児」を聞きたいものです。

77 仁科 光司

四十八歳、不惑の年になりましたが、迷ってはかりいます。下の子供が大学に行くまであと7年、五十五歳の時、その時こそ……うーん、まだ惑いの現役でいるじゃないのかな。

93 相田 頼子

現在は日本航空から日本アジア航空へ出向して台湾の空を飛んでいます。

95 酒井 直樹

東京銀行より経済企画庁に出向しており、現在「世界経済白書」の執筆を行っております。

98 鈴木由紀子

少し、夏バテ気味です。何か元気のあるようなおもしろいことがないかな、なんて思っています。

102 花村 宣昭

静岡信用金庫に就職が決まりました。

【0424-67-7061】

▲東京電力【03-480-4809】

181 三鷹市牟礼6-24-12-211

▲三井石油化学

160 新宿区喜久井67【03-203-4460】

▲佛法華倶楽部【03-823-6312】

194 町田市本町田1544-31

251 藤沢市片瀬4-8-11【0466-22-2057】

▲東レエン지니어リング

◆ 中西 安幸

◆ 松永 烈

◆ 大原 順治

◆ 甲賀 正己

◆ 矢部 正 151 杉並区阿佐谷北1-47-9 パル103【03-330-2216】

◆ 阿部 有倫 153 目黒区五本木3-27-9-803

◆ 岸本 徹 240 横浜市保土ヶ谷区弘向町1884-5【045-333-3908】▲光建産業

◆ 栗田弘之助 233 横浜市港南区丸山台4-13-6

【045-846-0571】

▲日本軽金属【03-456-9230】

名簿補遺訂正表 (変更事項 新入会員) 平成2.4.1~10.15 ●自営 ▲勤務先 ■学生

- 30 神谷 啓作 削除
45 松林 晋一 235 横浜市磯子区森2-6-13 磯子ガーデン101
▲(株)サンオンワード【03-342-3981】
49 曾根重四郎 【045-561-7672】
53 木宮 高彦 大田区東嶺町35-8
57 酒井 博 ▲(財)日本ガス機器検査協会専務理事
58 小山 昂之 勤務先削除
〃 藤田 登 勤務先削除
〃 岩本 忠吉 勤務先削除
59 福原 元一 ▲金属鋁業事業団理事長【03-503-2801】
〃 小花 敏郎 213 川崎市高津区二子505サンクレスト506
- 61 伊藤 久 230 横浜市鶴見区北寺尾5-6-15
バインクレスト北寺尾404
67 向井 久和 ▲沖電気工業㈱
68 望月 節 ▲国民金融公庫本店検査部
70 池ヶ谷 慎男 422 静岡市寿町11-15
71 松隈 道雄 ▲【03-457-4558】
〃 片山 守彦 359 所沢市下安松1045-2-503
73 朝倉 捷治 中野→中町
〃 木俣 晃 削除
〃 牧野 昭雄 280-02 千葉市椎名崎町あゆみ野11-42-7
【0472-92-0557】
〃 松下 勝朗 【045-701-4588】
〃 山梨 由紀 ●山梨㈱【03-643-7114】
〃 斉藤 幸男 【045-901-0100】
〃 中西 英一 藤沢市本藤沢3-2-12
〃 山本 昌秀 247 横浜市栄区
〃 後藤 孝子 152 目黒区大岡山1-34-6-209
【03-725-2272】 ▲立教英国学院東京
事務所
〃 飯塚 迪子 179 練馬区光が丘3-7-4-404
〃 林 さち子 削除
〃 磯村 達三 本町7-21-6-518
〃 鈴木 千秋 351-01 和光市本町31-4-1207
【0484-66-6067】
▲東燃㈱【03-286-5186】
〃 中川 明久 ドミ麻布303
〃 西本 昇平 【0474-79-1893】 ▲【03-817-9951】
〃 君島 武男 【045-881-8806】
〃 田中 啓作 横浜市旭区若葉台4-7-1007
【045-921-5079】 ●インテリアタナカ
〃 前田 修 【0471-29-7655】 ▲【03-543-5111】
〃 山下 勇三 344 春日部市備後1909-5
【048-734-5714】
〃 鈴木 良明 平塚市綱346-8 【0463-34-9597】
〃 柴田 文男 削除
〃 小林 一司 【03-367-8208】 勤務先削除
〃 赤木 政夫 ▲【03-495-2223】
〃 梶原 重則 710 倉敷市西坂1480-27 【0864-62-2819】
▲【0864-62-2819】
〃 佐々木勝彦 245 横浜市戸塚区汲沢4-16-8
〃 永井 敏夫 高萩市安良川
〃 深沢 靖男 194 町田市木曽町621-7 【0427-22-2301】
〃 野桜 茂章 長井町3-23-29 【0468-56-6102】
〃 飯野 理 106 港区元麻布2-7-27-403
【03-440-3648】
〃 柴山 欽伍 ▲【03-495-2226】
〃 関 悦男 世田谷区用賀2-12-4-101
〃 原川 順男 ▲【03-259-3405】 タマランブル削除
〃 古井大一郎 目黒区上目黒4-5-6
74 加藤 恒行 ▲㈱三岩エンジニアリング取締役
システム開発本部長
83 村上 真章 削除
- 88 秀島 道子 134 江戸川区中葛西5-37-8-203
【03-5696-8783】
93 野末 英男 274 船橋市葉台4-24 二官住宅2-102
94 中村 務 183 府中市美好町3-3-4
エスポワール分倍河原203
〃 宮城 倫子 134 江戸川区中葛西5-37-8-803
グレースマンションII 【03-804-3432】
〃 小池 一徳 338 与野市桜丘2-10-15-403
【048-857-6440】
96 米沢みどり 181 三鷹市中原2-16-6 【0422-49-1403】
98 池田 良夫 転出
104 水野 恵介 転出
106 高木 信幸 転出
- 新加入
73 麻生 貞敏 255 神奈川県中郡大磯町東小磯368
【0463-6-4817】 ▲西武オールステート
生命保険【03-983-6666】
〃 池ヶ谷 章 272-01 市川市塩浜4-2-29-702
【0473-99-8621】 ▲安田信託銀行
【03-274-9230】
〃 大河内 久 253 茅ヶ崎市美住町2-38
【0467-58-4897】
▲石川島播磨重工【03-244-5389】
〃 大木 茂 191 日野市旭ヶ丘1-10-25
【0425-81-0016】 ▲大木不動産
〃 加藤 元彦 203 東久留米市滝山2-5-9-202
【0424-72-6004】
▲(株)新川【0425-60-1231】
〃 小野田澄子 151 渋谷区千駄ヶ谷4-9-24-607
(旧姓栗田) 【03-401-1370】
〃 大村 春樹 156 世田谷区桜1-61-21 【03-425-8033】
▲KDD
〃 杉山 正三 281 千葉市小中台町567稲毛スカイタウン
1-503 【0472-56-3088】
▲熊谷組【03-260-3111】
〃 杉山 正倫 150 渋谷区恵比寿4-28-5 ニューヒカリ
コーポ402 【03-442-2593】
▲日本電子専門学校
〃 栗山 達 170 豊島区東池袋3-15-2-701
【03-983-3120】 ▲内野診療所
〃 児玉 光宏 251 藤沢市弥勒寺4-11-4
【0466-25-1687】
〃 清水 純 274 般橋市田喜野井4-29 3-302
【0474-63-1761】 ▲海事国際協力セン
ター【03-462-4841】
〃 宮崎 禎雄 271 松戸市小山420-1 松戸小山フラット
204 【0473-68-0047】
▲J R東海(東京)【03-212-8976】
〃 小原 健 279 浦安市美浜1-6-405
(旧姓柳沢) 【0473-55-9728】
▲ニチアス【03-438-9728】
〃 山崎 智弘 168 杉並区和泉3-8-27 【03-327-1677】
▲日本石油【03-502-1111】
〃 吉田志年司 965 会津若松市堤町1057
【04242-24-6549】
〃 遠藤 聡 321 宇都宮市峰町509-10
【0286-36-2443】 ▲オリエンタル建設
東京支店【03-462-5561】
〃 柴田 隆 166 杉並区高円寺南5-26-14
【03-312-6652】
▲日本石炭協会【03-214-0583】
〃 山本 登 333 川口市柳崎2-11-6 【0482-61-1414】
▲大登木材【0482-61-1414】
〃 楠原 由之 202 保谷市富士町4-12-7

鈴与株式会社

取締役会長 鈴木与平 (44期)

清水市入船町11-1

Tel 0543 (53) 3111 (大代表)

東京支社 千代田区丸の内2-3-2 郵船ビル4F

Tel 03 (284) 0551 (代)

トッパン・ムーア株式会社

取締役会長 宮澤次郎 (42期)

東京都千代田区神田駿河台1-6

TEL (295) 2411 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東1-5-1

TEL (833) 2111 (大代表)

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶原由三 (67期)

東京都中央区八丁堀2-1-7 神鋼ビル

TEL 03-553-8981 (代表)

株式会社 東電社

取締役社長 岩波信平 (42期)

東京都中央区日本橋2-1-21

TEL (271) 2701 (大代表)

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井平一郎 (57期)

本社 静岡市国吉田645

TEL 0542 (62) 1111 (代)

東京 中央区京橋1-2 越前屋ビル

TEL 03 (272) 4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役 奥澤徹 (59期)

本社工場 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6 〒246

Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547

大和工場 大和市深見3706-1 〒242

Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343

東松山工場 東松山市大字新郷88-47 〒355

Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

建築コンサルタント・設計施行業務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大雄

取締役社長 奥野孝 (53期)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-834-5331 (代表)

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥野孝 (53期)

取締役社長 奥野進 (56期)

取締役副社長 奥野広 (58期)

本社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

Tel 03-842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

Tel 0542-46-9378

総合広告代理店

株式会社 アドプロ

代表取締役 朝比奈正三 (67期)

東京都千代田区内神田3-4-5 岡崎ビル3階

TEL 03-254-2171 (代表)